

特別記事

世界のドラフトホース (5) イギリス, アイルランド編 柏村文郎



柏村文郎 (かしむら ふみろう)

1950年生まれ。1977年に帯広畜産大学畜産学研究科修士課程を修了。1977年から4年間全国酪農業協同組合連合会に勤務。1981年に帯広畜産大学助手採用、現在同大学食料生産科学講座(家畜生産科学分野)教授。学生時代4年間馬術部を経験し、現在は馬術部部長。研究教育は乳牛の管理と馬学。研究室ではアラブ、北海道和種馬など10頭の馬を学生と共に管理している。

1. イギリスの馬事情

1) イギリスの馬術団体

英国はサラブレッドという優れた競走馬を作出した国である。しかし、馬術用のスポーツホースはドイツやフランスなどに遅れをとっているのが現状である。乗馬関係者は、英国産スポーツホースの生産を願っているが、なかなか思うようには進んでいないようだ。

イギリスにおける馬の位置づけは、牛、羊、豚などの農業用家畜ではなく、犬や猫のようなペットと同じ範疇にある。馬は、もっぱら馬術競技やハンティング、レジャー用乗馬として活用されている。さらに、ポニーが乗馬として重要な位置を占め、子供のころから馬に親しむ環境が整っている。写真1はロンドンのハイドパークで見られた光景であるが、馬を愛する者にとってはうらやましい眺めである。



写真1 ロンドンのハイドパークで見かけた風景 (古村撮影)

イギリス馬事協会(BHS)の説明では、イギリスの乗馬人口は200万人であるという(パンフレットでは240万人となっていた)。イギリス馬術連盟(BEF)会員は25万人ということであるから、馬術連盟には加盟せず、レジャー乗馬やトレッキングなど野外騎乗を楽しむ人口がたいへん多いことを示している。ちなみに、イギリス馬事協会の会員は5万5千人、ポニークラブ(18歳まで)の会員は4万人である。

イギリスにおける馬とポニーを合わせた頭数は、50万頭とのことであった(パンフレットでは100万頭近くいると書いてあった)。ただし、半数はポニーということである。1997年のFAO統計では、イギリスの馬の飼養頭数が17万3千頭とある。FAO統計は食料農業の統計であるから、ペットとして馬を飼う国の飼養頭数はなかなかつかみづらい。なお、日本のサラブレッドもFAO統計には含まれていない。

2) イギリス馬事協会 (British Horse Society: BHS)

イギリスには馬に関する団体が非常に多く、イギリス馬事協会に加盟している生産者団体は35団体にも及ぶ。馬の登録は1品種1団体とはっきりしている。

私たちが訪問したイギリス馬事協会は、1947年に馬研究所(The Institute of the Horse)と乗馬学校が統合されてできた全国組織である。イギリス馬事協会には次の8部門がある。

- 馬の道 (Access and Rights of Way) : イギリスでは私有地をトレッキング道路 (bridleways) として利用できる仕組みがある。
- 馬の福祉 (Welfare) : 馬を虐待から守る活動で、馬

の愛護のための教育，助言，支援，ガイダンスを行っている。馬の救助センター（Rescue Center）もある。

- c) 事故対策（Safety）：年間3千件の事故があり，特に野外騎乗での事故は重大事故につながりやすい。
- d) 教育と訓練（Training and Education）：馬に関する知識が十分でない人も簡単に馬を飼える環境であるため，馬についての教育と飼養管理について教えている。
- e) リクレーション乗馬（Recreational Riding）：旅行者と提携した馬のトレッキング組織やハンティング乗馬の組織と綿密な関係を保つ。
- f) 乗馬クラブ（British Riding Clubs）：400の乗馬クラブ（会員4万人）が加盟しており，ポニークラブとも密接な関係を保っている。
- g) 乗馬学校（Riding Schools Approvals）：世界にある700の乗馬学校を統括し，指導する。イギリスには2,000カ所の乗馬施設があり，それらの監督も行う。イギリス国内では一定基準に達した認証乗馬施設は1,000カ所あるという。乗馬指導者の資格は次の4つに分類されている。①Degree Level（新設された大卒資格レベル），②Fellow of BHS（54人），③Instructor（2,500人），④Assistant Instructor（4,000人）。
- h) クロスカントリー競技（Hunter Trials）：イギリスでは馬場内で乗馬するより野外騎乗の人気の高い。その野外騎乗競技を統括する。

2. イギリスのドラフトホース

イギリスの農用馬は，ヨーロッパ大陸の先進諸国と同様に戦後急速に減少した。今では共進会や農業ショーが主たる活躍の場である。イギリス原産の有名なドラフトホースとして，シャイア，サフォーク，クライズデールがあげられる。そのうちシャイアとサフォークはイングランドの馬で，クライズデールはスコット

ランドの馬である。それぞれの品種について以下に記す。

a) シャイア Shire（写真2）

原産地は，イングランド中東部の湿地帯（the Fens）である。英語のシャイアとは「country」の意味である。イングランドの田舎には，地名に「…シャイア」のつく地方が多いから，そのような地方で広く飼われていた馬たちであったと思われる。中世後期以前の考古学遺跡から出土した馬の遺物によると体高は142.2 cm程度であった。しかし，現在この馬の体高は180 cmにもなり，世界で最も体格の大きい重挽馬である。重い泥炭土壌を耕すために力の強い大型の馬が求められたのだろう。また，中世のイングランドには，重い甲冑を身に付けた騎士を乗せていたグレート・ホースと呼ばれる軍用馬がいた。この馬にベルギーのフランダース地方の馬（現在のベルジアン）を交配してシャイアが作られたと言われる。平均体重は1トンにも及び，5トンの荷を牽引することができる。忍耐強く，温順で，農作業に適していることはもちろん，肢が長く速く歩けるため，町で荷馬車を引くのにも適している。伝統を守るロンドンでは，今でもビール醸造業者がビールを配達するのに利用している（写真3）。毛色は，鹿毛，



写真2 シャイアの雌馬



写真3 ビール工場で働くシャイアー
去勢馬, 10歳, 黒鹿毛。体高182, 体長202,
胸囲236, 管囲26.5 cm



写真4 サフォーク・パンチの雌馬

黒鹿毛, 青毛または芦毛がある。後述のクライズデールとは親戚関係にあり, 顔面および四肢の白徴と肢端の長い距毛が特徴になっている。

シャイア馬協会の会長は, 馬を愛することによって有名なイギリス王室のアン王女である。現在は農作業で馬を使っている農家はほとんどなく, レクリエーションやレジャー, ショー (共進会) が主な活躍の場である。日本では, 家畜のショーは余り一般的ではないが, イギリスのロイヤルショー (農業) は一般市民も大勢見物にでかける一大イベントである。そのようなショーにおいて, ひときわ大きな体格をしたシャイアは一番の人気者で, Gentle Giant (優しい巨人) とも呼ばれている。

シャイアのブリーダー (生産者) の数は約800名, 繁殖雌馬の頭数は1,200頭で, 子馬の生産頭数は年間約600頭程度とのことである。サラブレッドのような競走馬と違い, ドラフトホースの生産者は, 1戸で1~2頭の繁殖雌馬を持つ農家が最も多い。繁殖用の種雄馬を選抜するための検定制度があり, その審査員 (ジャッジ) は約100名いる。現在人気のあるタイプは, レジャーやショーを目的とする大型で, 肢が長く, 動きの良いショータイプの馬である。体高が190 cmを越

す馬もいる。また, 人気のある馬は, 毛色が黒鹿毛で, 顔面の白徴は大流星鼻梁鼻大白, 四肢長白の馬だという。

b) サフォーク・パンチ Suffolk Punch (写真4)

イースト・アングリア (イングランド東部) のサフォーク地方で作出された重挽馬である。この馬はイングランドの馬の中では最も古い歴史をもち, その祖先は全て, トーマス・クリップスが所有していた1768年生まれの1頭の種雄馬に行きつくと言われている。初期には, この地方でノーフォーク・ロードスターと呼ばれていた馬車用馬の影響を強く受けた。さらに軽快な速歩馬であったベルギーのフランダース産の雌の栗毛馬が改良に使われたという。毛色は栗毛のみ (栗毛の法則) で, その血統の純粹さが伺われる。写真5はサフォークのスタッドブックである。サフォークの名称は地方名からきているが, パンチという名称は, イングランドにおいて, 短い肢で, ビール樽のような胴体の馬に付けられる愛称だという。性格は非常に温順だが, 動作は機敏で, あらゆる農作業に広く利用できるのが特徴とされる。前述のシャイアとは違い, 距毛が少なく, 蹄が硬いのは, この地方の硬い粘土質土壌のためである。体高は160~162 cmとそれほど高くないが, 体重は1トン近くになる。

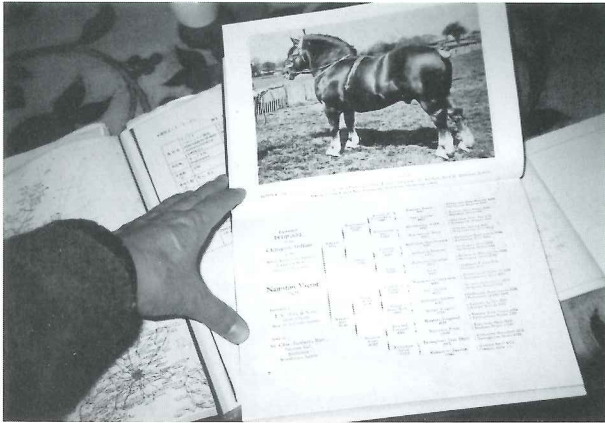


写真5 サフォーク・パンチのスタッドブック

サフォーク馬協会のメンバーは800人で、1998年の飼養頭数は、雄25頭、雌100頭、去勢75頭となっている。飼養頭数は全体でも200頭前後であるから、希少家畜といえる。改良の重点は、肢蹄がしっかりして、胸幅が広いことであり、ショータイプ傾向が強いシャイアとは一線を画している。

c) クライズデール Clydesdale (写真6)

英国の最北に位置するスコットランドを代表する重挽馬。スコットランドは、イングランドのアングロサクソン文化とは違い、ケルト文化が今も色濃く残っている。古都エジンバラの北にあるクライド渓谷 (Clyde Valley) がクライズデールの故郷である。その地方は軟らかい沼地土壌のため、地面に沈まないようにその蹄は大きく平たく改良されたという (写真7)。クライズデールはシャイアより多少小型であるが、四肢が長く、顔面および四肢の白徴、さらに長い距毛などの外見はシャイアとよく似ている。これらの特徴は、ともに湿地帯という土壌と、18世紀の初めベルギーのフランドル地方から輸入された馬が交配された影響によるといわれている。クライズデールとシャイアは、このような共通点をもつため、互いに交配されることもあるという。体高は平均162cmとされるが、最近ではショータイプとして大型化の傾向にある。



写真6 クライズデール去勢馬



写真7 大きな蹄がクライズデールの特徴である。この写真はショーに出す前なので、蹄と距毛を保護するワンコがつけられている。

クライズデール馬協会のメンバーは400～500名で、飼養規模は3～4頭/戸が中心。2000年の繁殖雌馬は600頭、若雌馬は400頭、雄は60頭であった。使役馬としての役割が終わった現在、その飼養目的はショーとノスタルジアだという。私たちが訪問したときにミレニアルイベントが行われ、古きよき時代の農作業風景をみることができた (写真8)。

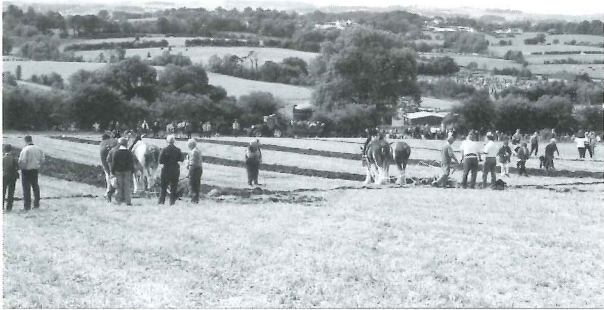


写真8 クライズデールのミレニアムイベントで行われていた
ブラウイング競技



写真9 アイリッシュ・ドラフトホース

3. アイルランドの馬産

アイルランドは日本人にはあまり馴染みのない国だが、馬と人との関係はたいへん密接な国である。そして、国を上げて馬の生産と輸出を奨励支援している。その主な生産馬は、サラブレッドとアイリッシュ・スポーツホースである。アイリッシュ・スポーツホースとはサラブレッドとアイリッシュ・ドラフトを交配して作出された馬である。ヨーロッパではかなり高い評価を受けている。その育種改良は戦略的であり、畜産を専門とする私の目からみると馬生産の考え方が非常に進んだ国という感じがした。

a) アイルランド馬事協会とスポーツホース

アイルランド馬事協会 (The Irish Horse Board) は1994年に設立された比較的新しい協会である。この協会の仕事は、①スポーツホースの振興と販売促進、②馬の質的向上の支援、③アイルランド馬の血統書管理、④馬の教育および旅行業者と協力した馬の観光振興である。訪問した当時の会員 (ブリーダー) は9,000人で、スタッフは10名であった。ブリーダーの70%は、1~2頭の繁殖雌馬を持つ小規模な生産者である。1999年の繁殖雌馬は7,000頭で、登録された子馬は4,750頭であり、雌馬の繁殖生産率は67%だった。繁殖の

20%は人工授精で行われている。雄子馬の内訳は、アイリッシュ・ドラフト21%、サラブレッド36%、スポーツホース30%、外国産馬9%、その他4%となっている。スポーツホースの繁殖雌馬の登録検査は、30地区の共進会において3~10歳の年齢カテゴリー別に行われる。雄馬の能力検査では3~4歳の雄馬が集められ、5人の審査員によって12週間のテストを行うという。まず体型や動きなどの審査で30頭の候補馬を選び、さらにその中から8頭を選抜する。それとは別に遺伝能力評価は障害飛越競技の成績、体型審査や歩行検査をもとにBLUPで計算される。スポーツホースとしては、アイリッシュ・ドラフトホースの血量が12.5~25%がベストだという。

b) アイリッシュ・ドラフトホース Irish Draught Horse (写真9)

この馬は、ドラフトホースという名前がついているが、乗用馬と区別が付かない体型をしている。古くは、農場での畑仕事や荷物の運搬、馬車の牽引、乗用など多目的用途に使われていた。この馬の起源は必ずしも明らかではないが、初期の段階では、アイルランド西岸のコネマラ地方の在来馬にスペイン馬が交配されたとされている。1172年にノルマン人がアイルランドに

侵入したとき持ち込んだフランス馬およびベルギーのフランダース馬の影響が大きいともいわれている。その後、東洋系馬（アラブ）およびスペインのアンダルシアンによって改良された。アイルランドの石灰質の土壌と気候の好条件によって、すばらしい骨格、容姿、馬格の馬ができあがった。特長は、力強く、勇敢で、頭がよい（調教を良く理解する）ところだという。狩猟を好むアイルランド人は、野外の障害物を飛越するためのハンターとして改良したため、障害を恐れない勇敢な性格が備わったともいわれている。典型的なアイリッシュ・ドラフトホースの毛色は芦毛であるが、全ての単毛色がみられる。体高は163～173 cmである。1999年の子馬の本登録は251頭、補助登録は68頭であった。なお、補助登録とはその品種の血量が足りなかったり、祖父母などに血統不詳が含まれたりした場合に行われるものである。アイリッシュ・ドラフトホース協会の会員数は、国内約650人、国外ではアメリカ、オーストラリアなどに1,000人おり、海外の登録にはアイルランドから審査にでかけるという。約50%はスポーツホースの生産を目的として飼養されている。

5. まとめ

イギリスにおける馬の位置づけは、犬や猫と同じペットとして分類されている。馬の登録協会は1品種1協会がはっきりしている。これは個人の好みがはっきりしたイギリス人らしく、個人主義の徹底振りがうかがえる。しかし、この個人主義と伝統を守る国民性が、



写真10 イギリスにはベルシュロン協会やアルデンネ協会もある。この写真はアルデンネで楽しんでいる風景。

英国スポーツホースの作出にはブレイキとして働いているようであった。一方、子供の乗用馬として適したポニーが多く、この国の馬文化の底辺にはポニークラブの存在があるように感じた。最近のシャイアとクライズデールはショータイプに向かっており、古いタイプのサフォークとは一線を画しているようであった。そのサフォークは希少家畜になっていた。

アイルランドは国をあげてスポーツホースの生産に意欲的に取り組んでいる。アイリッシュ・ドラフトホースは、スポーツホースを生産するための種馬として利用されている。その育種改良には、ヨーロッパ全体または世界市場を視野に入れた馬産戦略がみられた。国民の馬に対する造詣が深く、馬を扱う人材が豊富なのもこの国の特徴だと感じられた。